

James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, John C. Maraldo (eds.), *Japanese Philosophy: A Source-book* (University of Hawaii Press, August 2011)

## 苺部直

千三百四十頁にわたる大部の書物である。表紙に和綴じ日本の写真をあしらって装訂されており、英語の表題と並んで、「日本哲学資料集」の日本語表題が題簽に記されているという趣向。南山大学の南山宗教文化研究所による「南山宗教文化叢書」の第十冊として刊行されている。装訂は日本、発行は米国ハワイのホノルルで行なわれ、巻頭の一覧では百名をこえる翻訳者・寄稿者の出身地域は、欧米圏と日本・韓国・中国にわたる。グローバル化の時代における日本思想史資料集の登場である。

しかし、この本について何かを書くというのは至難の業である。収録された資料は、古くは聖徳太子の憲法十七条にはじまり、大橋良介、藤田正勝、柄谷行人といった、いまも活躍中の人々による文章にまで及ぶ。抜粋し紹介されているテキストの数は二百二十をこえている。それぞれの選定について論評し、翻訳の出来を吟味した上で、全体の編集について総合評価を下すのは、夏休みの宿題としてもそうとう重い仕事になってしまう。

だが幸いなことに、この欄は「書評」でなく「紹介」である。「紹介」欄の晴れある第一回を飾り、あとの号で担当されるみなさまに安心していただくため、堂々と手ぬきをさせてもらうことにしよう。以下に記すのは、この本の冒頭にある「序説 (Framework)」と、それぞれの章・節・項目の前に載っている「概観 (Overview)」を文字どおり斜め読みし、収録作品の選定の意図を考えた限りで抱いた印象にすぎないので、誤解も少なからず含んでいるだろう。より正確な論評は、他誌(あるいは本誌)でもっと本格的な書評が出るのを期待してほしい。これはあくまでも、筆者の臆断に基づく「紹介」である。

なぜ「日本思想史」でなく「日本哲学」なのか。たとえば京都大学文学部のウェブサイトでは、日本哲学史専修についての説明に「明治以降の日本の哲学の形成と発展」を取り扱うところのだが、本書の場合は、時代の範囲を前近代にまで広げ、日本の「哲学」をさまざまなテキストから探るという方針を採っている。明治時代における西洋哲学の受容が、その後の日本における「哲学」的な思考の営みの出発点になったことは確かだとしても、それ以前からあったさまざまな伝統が「文化的背景」として、近代の思考にまで影響を残していることは疑いない。そうした見地から、この本のほぼ半分は、仏教・儒学・神道といった前近代の思想資料によって占められている。

では、みずから「哲学」と名乗っている近現代の思想家と違って、そういう自己意識をもたない前近代の思想のなから、

どうやって日本の「哲学」を選びだすのか。本書の「序説」は冒頭頁で、インドと中国に関する欧米での研究が、それぞれの国の哲学に関する考察を中心に発展してきたのに対し、日本研究においては「哲学」にほとんど関心が向けられないと指摘したあとで、こう語っている。引用は拙訳による。

西洋世界が目にする日本文化の顔は、以下のようなものである。俳句、禅寺の庭園、茶道、格闘技、物語、そして近年になるとアニメとマンガ。しかしこうした現象の背後には、思考と価値における、力づよい批判的諸伝統が横たわっているのであり、そうした諸伝統を呼ぶには「哲学」よりもふさわしい名前がない。日本の哲学に焦点をあてることは、したがって、われわれ西洋人の哲学に関する理解を、そしてまた日本に関する理解を広げるとともに深めることに役だつのである。

つまり、異なる文化圏ではそれぞれに違った思考様式が育っているのであり、その意味でいわゆる「哲学」はあくまでも西洋文化のもとのみ発展した。そうした文化相対主義に基づく見解を、前提としては編者たちも認めている。しかし、西洋の哲学と同じではなくとも、それと類似した「批判的」な思考は、日本文化の伝統にも存在してきたと見なし、それを広い意味での「哲学」とあえて呼ぶのである。西洋の伝統に囚われた「哲学」観を広げ、さまざまな思想伝統における「哲学」を発掘する営みを通じて、「哲学」の像をより多様で開かれたものにする

こと。そうした問題関心を明快に示している。

したがって、ここに収録されたテクストが、古代から現代にまでわたり、仏教者、儒学者から近現代の学者や文学者にまで及ぶ、大量のものになるのも頷ける。たとえば昭和初期に流行した「日本精神」論のように、何か一つの思想潮流をとりだして、それが時代をこえて持続してきた系譜を描くことに、編者たちの関心はない。

むしろ日本の思想の歴史のなかで、さまざまな分野において、多様な思考の営みが展開してきた跡を示そうとするのである。量が膨大になるのも当然であり、編者と訳者たちの努力に、まずは感謝したい。この本が刊行されたおかげで、英語圏の大学における日本思想の授業の水準は、大きく上がることだろう。以下、この「紹介」では時に批判めいた発言にも及ぶが、それはあくまでも本書を高く評価した上でのふるまいであり、刊行された意義を否定するものではまったくない。

本書の構成は、第一部「諸伝統」と第二部「特別なテーマ (Additional Themes)」と大きく岐れている。「諸伝統」は、「憲法十七条」「仏教の諸伝統」「儒学の諸伝統」「神道と国学」「近現代のアカデミズム哲学」という章の構成になっている。そうした系列を横断して論じられたテーマをいくつか選び、それぞれについて五、六ほどの思想家もしくは思想潮流を紹介するのが、第二部の「特別なテーマ」である。

まず、第一部「諸伝統」を見てみよう。最初に気づく大きな

特徴は、冒頭に「序曲 (Prelude)」として、聖徳太子の憲法十七条が挙げられていることである。『日本書紀』に載っているその成文が、聖徳太子よりも後の時代の産物ではないかと以前から指摘されており、聖徳太子その人の実在を疑う学説すら登場している研究の現状からすると、かなり大胆な選択であろう。ついでに言えば、この「憲法」を *constitution* と訳しているのも、文書の内容について誤解を招かないだろうか。

しかしこれを冒頭に置いたのは、編者たちの明確な意図に基づいている。編者の一人、トーマス・P・カスリスがこのテクストの英訳に付した解説によると、憲法十七条は西洋哲学におけるソクラテス以前の哲学者たちと同じように、それ以後の時代における日本の哲学の伝統のうち、大部分の傾向を決定づけたのだという。儒学と仏教の併存、自然界と人間社会との連続性、真理を追求する集団。そうした特徴が、のちの諸思想にも引き継がれたというのである。

つまり編者たちは、『古事記』『日本書紀』などに記された神話が、日本思想史の出発点だといった歴史観をとっていない。神話については、仏教と儒学を扱ったあと、三番目に「神道と国学」の章の概観で紹介されるのみであり、その章の収録テクストは賀茂真淵以降、近代の折口信夫らに至る七人の思想家のみと、そつけない扱いになっている。國學院大學や皇學館大学では、外国人むけの授業の教材に使うのがむずかしいかもしれない。

これに対して「仏教の諸伝統」の章は、本書におけるいわば最大派閥である。「諸伝統」の冒頭に置かれ、とりあげる思想家は二十六人。そのなかでも「禪の伝統」の節が十二人と、最強の扱いである。これに対して「浄土教の伝統」の節は法然、親鸞、清澤満之、曾我量深、安田理深の五人のみ。それ以外という扱いで挙げている仏教者・仏教学者も、空海、日蓮、中村元など少数にすぎない。「禪の伝統」の節の冒頭に登場するのは道元で、収録テクストは七本に及び、二十三頁を費やして、仏教者のなかで最大級の扱いである。

もちろん本書は、先にふれたように儒学や神道・国学への目配りも欠いていないし、すべてを平等に扱うようなアンソロジーなど、およそつまらない。中世・近世の知識世界における仏教の存在感の大きさを考えれば、多くの紙数を割くのもやむをえないだろう。しかしいくら何でも、これでは禅宗びいきが過ぎるのではないか。これを読んで、日本人は全員、禅に入門しているかと勘ちがいする外国人は出てこないだろうか。仏道に縁なき門外漢としてはそう心配してしまうのである。「禪の伝統」の最後に唐木順三が登場するなど、おもしろい特徴もあるが、これに比べると、「儒学の諸伝統」の章の構成は、林羅山、山崎闇斎、伊藤仁斎、荻生徂徠など有名な顔ぶれが並び、仏教に比べて穏健な選択ぶりと言える。ただその内訳を見ると、収録テクストの数が、熊澤蕃山・浅見綱斎が四本、中江藤樹・山崎闇斎・佐藤直方が三本なのに対し、伊藤仁斎は一本のみ、荻

生徂徠は二本。これも編者たちの徳川思想史理解を反映しているのかもしれないが、少なくとも先行研究の多寡とは対応していない。あるいは英米圏では蕃山や綱齋が大人気なのだろうか。安藤昌益や二宮尊徳がこの章に入っているのも、やや疑問ではある。

「儒学の諸伝統」「神道と国学」と続いた後にくるのが、「近代のアカデミズム哲学」の章である。その節の構成は「出発・定義・論争」「京都学派」「二十世紀哲学」となっているのだが、編者たちが何を最も重要視しているかは一目瞭然だろう。ずばり「京都学派」で、その冒頭に置かれた西田幾多郎が二十五頁、本書では最大の存在になっている（第二位は先にふれた道元で、第三位は親鸞の十八頁）。節の冒頭に置かれた、編者ジョン・C・マラルドによる概観は、「京都学派」の哲学者による戦争協力の問題にも説き及び、均整のとれた概論になっている。この節に入っただけでもよさそうな久松真一が、「禅の伝統」のなかにいるのも、本書の独自性だろう。

「二十世紀の哲学」は、波多野精一、阿部次郎、高橋里美、九鬼周造、和辻哲郎……と始まって、大森荘蔵や廣松渉や坂部恵にまで及ぶ。私見では、田中美知太郎、大塚久雄、斎藤忍随、矢内原伊作といった面々も入れてほしいのだが、編者の方針もあるだろうから、致し方ないところだろう。ただ、丸山眞男を「哲学者」として入れているのは卓見だと思いにせよ、収録テキストが丸山の仕事としては水準の低い「原型・古層・執拗

低音」のみというのは、どうなのだろうか。社会科学の分野から本書に登場しているのは、丸山ただ一人である。

この本の特色は、第二部「特別なテーマ」の構成にもよく現われている。章の構成は「文化とアイデンティティ」「武士の思想」「女性の哲学者たち」「美」「生命倫理」と続く。「女性の哲学者たち」の顔ぶれは、與謝野晶子、平塚らいてう、山川菊枝。活躍している女性の知識人が少ないせいで、こういう選択になったのだろうが、社会運動・フェミニズム系から選ぶのなら、むしろ森崎和江や石牟礼道子を入れるべきではなかったか。第二部でもっとも充実しているのは「文化とアイデンティティ」の章で、不干斎ハビアン、森有正、『世界的立場と日本』、『近代の超克』、竹内好（近代とは何か）など三篇）、柄谷行人（「エクリチュールとナシヨナリズム」）などが並んでいる。この章のテキストと概観だけ抜き出して簡略版が出版されているように思う。

以上、ただ外観をなぞっただけの「紹介」に終始したが、読者の方々もぜひ手にとって、ご自分の眼でたしかめてみられたらと思う。ふだん目にしていない日本思想史のテキストが、英語でどのように訳されているのかをたしかめるだけでも、興味ぶかい一冊である。厚い本なので値段は少々高いが、架蔵する価値は十分にある。